

関西理学療法学会 第9回一泊研修会

ナイトセミナー「身のまわり動作、生活関連動作を考える」

「更衣動作 一下衣の着脱について」

岸和田盈進会病院 リハビリテーション部
熊崎大輔 山内 仁

平成20年度診療報酬改訂によってADL加算が廃止された。先日の回復期リハビリテーション病棟連絡協議会の研修会で初台リハビリテーション病院の石川院長は、「リハビリテーションを実施するうえでADLの練習をすることは当たり前であり、そのことが全国的に周知されたため、加算の必要性もなくなった」と述べていた。ADLは生活のために目的を持った動作であり、リハビリテーションはその結果を出すための手段でなければならないのは言うまでもない。

入院していた患者さんが退院し、はじめて外来通院でリハビリテーションに来たときに見間違えることはないだろうか。入院中は、病衣やジャージなど動きやすい服装をしていたが、外来ではワイシャツにジャケット、スラックスといった服装を目にする。すべての患者さんがそうではないが、リハビリテーションでは練習をしたことのないような服装で来院されるとどのようにして着たのだろうかと考えることもある。そしてリハビリテーションで行った練習が実際のADLに反映しているのか、本人の努力なのか、介助のおかげなのかもう一度考え直すことがある。そこで更衣動作をテーマに挙げ、その動作の特長について考えたい。

更衣動作は1日の数回の着替えだけでなく、トイレに行ったときの下衣の上げ下げであったり、屋外に出る際に上着を羽織ったり1日の中でも頻回に繰り返される動作である。また社会的な側面からもTPOを考えた服装も日常的になされている。更衣動作は、姿勢や方法、衣服の種類によって必要な運動要素が異なる。特に下衣においては臥位、座位、立位の姿勢によって同じ下衣でも着脱方法が異なる。この異なった動作を健常者であれば、どんな姿勢でも、どんな方法でも、どんな種類の衣服でも様々なパターンで行うことができる。しかし何らかの障害によって、これらのパターンに制限が生じた場合、その患者さんにどんな動作を紹介、指導し、獲得させることができるだろうか。

今回のナイトセミナーでは、下衣の着脱に着目し、健常者のビデオカメラを用いた動作観察、重心動揺計を用いた足底圧中心(COP)の変化、表面筋電図を用いた着脱時における支持脚の筋活動を紹介します。更衣動作の下衣の着脱について検討する。